

世界トップレベルの 医療を提供するために

——日本の医療の現状と将来——

日本医師会

日本医師会

日本の医療費は本当に高いのか？

日本の医療の評価は高い！

健康達成度は世界1位

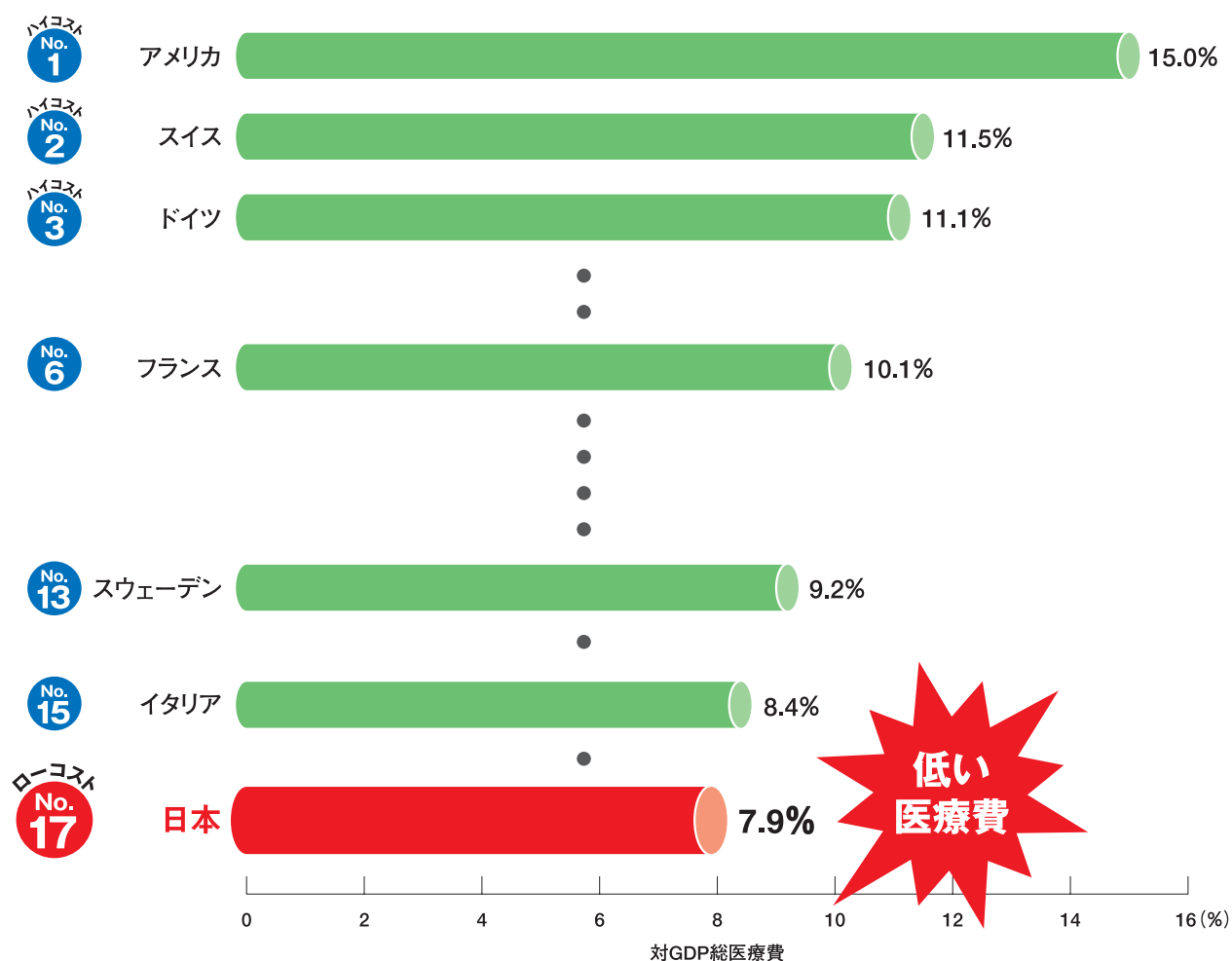
	健康達成度 WHO		乳幼児死亡率 (出生千人対) OECD 2002年	平均寿命 WHO 2002年	
	健康寿命 2002年	健康達成度の 総合評価 1997年		男	女
日本	1位	1位	3.0人	78.4歳	85.3歳
スウェーデン	3	4	2.8	78.0	82.6
イタリア	7	11	4.7	76.8	85.2
フランス	11	6	4.2	76.0	83.6
ドイツ	14	14	4.3	75.6	81.6
イギリス	24	9	5.3	75.8	80.5
アメリカ	29	15	6.8	74.6	79.8

世界保健機関(WHO)の発表する健康達成度の各国比較では、日本人の健康寿命は世界一、健康達成度の総合評価も世界一です。さらに、日本人の平均寿命は世界一長く、乳児死亡率の低さも世界トップレベルとなっています。日本の医療保険制度は、先進諸国中で最も成果を上げている優れた制度です。

出典：WHO(世界保健機関) The World Health Report 2004, 2000
OECD(経済協力開発機構) OECD Health DATA 2004, OECD National Accounts 2004

日本の医療費は安い！

国内総生産(GDP)に対する総医療費の割合



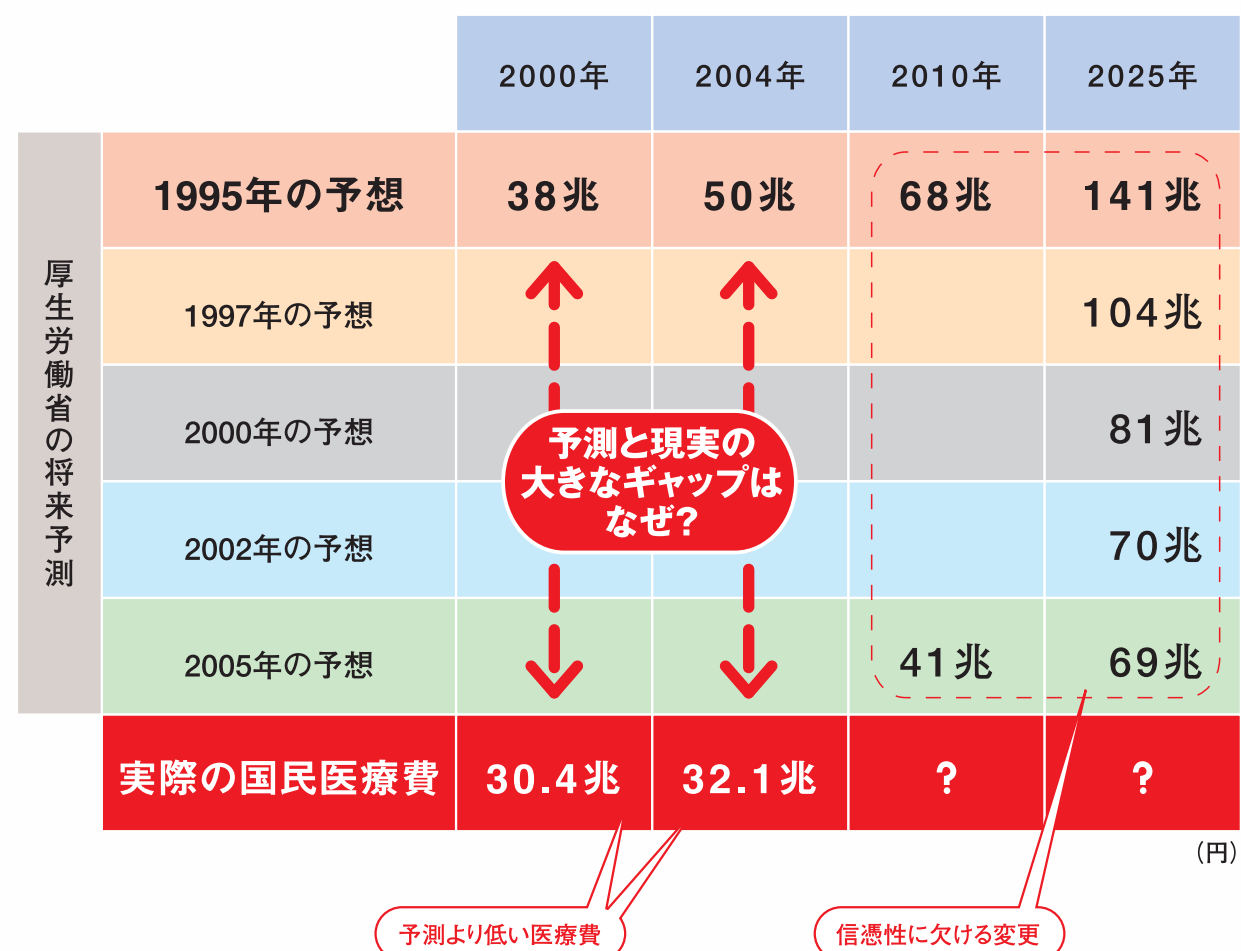
国内総生産(GDP)に対する総医療費の割合を比較してみると、わが国は17位(7.9%)で、国民医療費は先進諸国と比較して決して高いとはいえません。例えば、某保険会社の調査では急性虫垂炎手術入院の総費用は、ニューヨークで約250万円、ロンドンで約115万円であり、日本は約38万円と低い水準です。

出典：OECD(経済協力開発機構) OECD Health DATA 2005

医療費の抑制が本当に 必要なのか？

厚生労働省の医療費将来予測は誤り

高い医療費予測と低い医療費の現実



政府は国民医療費を高く予測し、医療費の抑制策を強く推進しています。しかしながら、2004年の予測は50兆円としていたのに対し、実際は32.1兆円にとどまっています。これは、何を目的とした予測なのか理解に苦しみます。2025年の予測も、その信憑性を疑わざるを得ない変更を毎回繰り返しています。

国民の痛みの歴史

国民の負担は増大、事業主の負担は減少

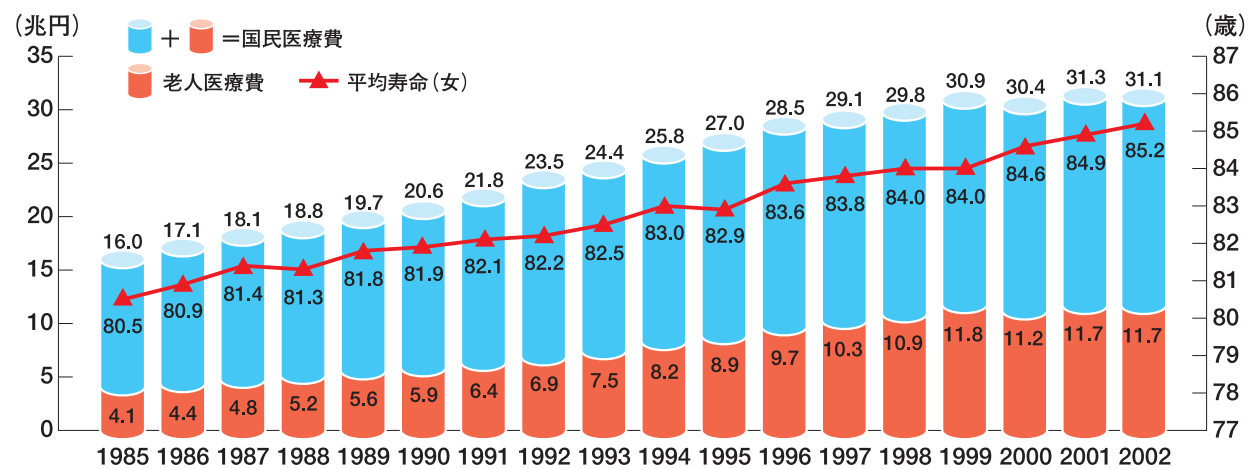


日本の国民医療費の財源は、公的負担（国と地方の税金）、保険料（事業主負担と加入者負担）、患者負担（受診時の一部負担金）で構成されています。この数年患者負担が大幅に増加する政策がとられています。一方で、事業主負担は減少しています。医療費負担が公平に配分されているとは思えません。

“国民が望む医療改革”の実現に向けて

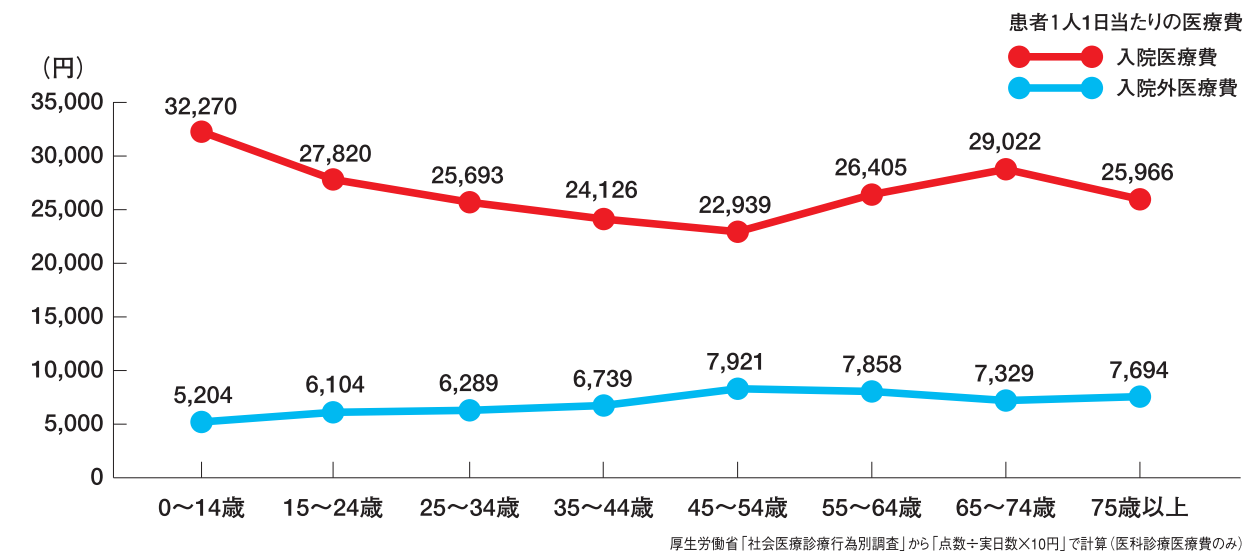
寿命が伸びれば医療費は増える

わが国の平均寿命は世界一。長生きすれば医療費は増加します。単に医療費を抑制する政策は、わが国の医療の質とシステムを破壊し、平均寿命を縮めることになります。



高齢者医療は高いのか

高齢者医療は高いという認識は正しいのでしょうか？ 1人1日当たりの入院医療費でみると、0～14歳が最も高額で、入院外医療費では45～54歳をピークとして、なだらかな放物線を描いています。



日本医師会は、医療改革を通じて、以下のような社会を実現します。

- 長寿を心から喜ぶことのできる社会（高齢者医療 高齢者福祉）
- 安心して赤ちゃんが産める社会（産科医療 母子保健）
- 子どもが元気ですくすくと育つ社会（小児医療 学校保健）
- 健康で生き生きと働ける社会（産業保健 労災保険）
- 病気の発生をできるだけ減らす社会（生活習慣病対策 禁煙運動）
- 病気の人に質の良い医療が提供できる社会（地域医療 医療保険）
- 医療提供体制が充実した社会（かかりつけ医 医療機能連携）
- 医学の進歩を医療に生かすことのできる社会（生涯教育 専門医制度）

